フランス人が見たドイツ合唱同盟祭（1865 年）

井上　さつき

ドイツにおいて、合唱はまさに国民的な制度である。われわれフランス人にとって気晴らしである音楽は、ドイツ人たちにとっては務めである。

エミール・ギメ『ドレスデンの五日間』

はじめに

19 世紀、ドイツは合唱大国であった。一方、フランスも――あまり知られていないが――合唱大国であった。しかし、ドイツとフランスは隣国でありながら、合唱運動のあり方はまったく異なっていた。本論文では、1865 年 7 月にドレスデンで開催されたドイツ合唱同盟祭に参加したフランス人二人の報告を通して、フランス人がドイツの合唱祭をどのように捉えたかを探り、両国の男声合唱運動の差異について考察する。

ドイツ合唱連盟は 1862 年に全国組織を結成し、普墺戦争直前の 1865 年 7 月 22 日から 25 日にかけてドレスデンでドイツ合唱同盟祭を催した。祝祭には 16,443 人の男性の合唱協会員が参加し、観客は 20 万人に達した（松本 2008 : 152）。このように大がかりに催されたドイツ合唱同盟祭はフランスでも話題になり、さまざまな音楽雑誌に記事が掲載されたほか、参加フランス人の手記も残されている。本稿の目的は、これらのフランス側の資料を読み解くことにより、フランス人の目から見たドイツの合唱祭の特徴を明らかにすることである。そこには、当事者には当然のこととして見過ごされがちなことも含まれているはずである。

今回、基本資料とするのは、エドモン・ヌーコム Edmond Neukomm(1840-1903)の「ドレスデンの音楽祭」とエミール・ギメ Emile Guimet（1836 - 1918）の『ドレスデンの 5 日間(1865 年 7 月)』である。ヌーコムの「ドレスデンの音楽祭」は音楽雑誌『アール・ミュジカル』の 1865 年 8 月 10 日号、8 月 17 日号、8 月 24 日号に 3 回続けて連載されたものである。著者のエドモン・ヌーコムは、ルーアンに生まれパリで没したフランスの音楽評論家で、オーストリア出身のオルガニスト・作曲家、ジギスムント・ノイコムの甥に当たる。エドモン・ヌーコムはドイツ語に堪能であることを生かして、『アール・ミュジカル』、『メネストレル』、『ルヴュー・エ・ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』などの音楽雑誌に寄稿していた。今回のドイツ合唱同盟祭には、ヌーコムはパリ在住のドイツ人の合唱団体「トゥトニア Teutonia 」の一員として参加した[1]。

一方、ギメの『ドレスデンの 5 日間』は、リヨン在住の実業家で合唱オルフェオン（アマチュア合唱団）運動に積極的に関わっていたエミール・ギメが著した小冊子である。ギメ美術館の創設者である彼は、東洋美術のコレクターとして有名で、1876 年（明治 9）に日本を訪れたことでも知られるが、音楽に造詣が深く、作曲家として、また、オルフェオン運動の推進者として、リ

ヨンの音楽生活に深く関与していた。ギメは1860年、父の後を継いで、リヨン郊外のフルリュウ・シュール・ソーヌの顔料工場の経営者となった。彼はすぐに労働者を集めて合唱オルフェオンを設立し、翌年にはフルリュウに農民たちを集めて器楽オルフェオン（吹奏楽団）を設立した。本稿で扱う1865年のドレスデンのドイツ合唱同盟祭参加に関しては、ギメはリヨンのオルフェオン団体の代表者として、リヨン在住のドイツ人合唱団体「セシリア　Coecilia」の代表者たちと共に現地に赴いた。彼はその年のうちにリヨンで『ドレスデンの5日間（1865年7月）』を出版したが、この小冊子は反響を呼んだらしく、『ドレスデンの5日間、1865年7月22日から26日の歌手たちの大フェスティヴァル』という題名ですぐに再版され、さらに、翌年1月から3月にかけて、オルフェオン専門誌『オルフェオン』に再掲載されている。

以上の経歴からわかるように、ヌーコムもギメも、単なる合唱祭の参加者ではなく、それぞれ、フランスの音楽界に身を置き、音楽に関する著述活動も行っていた「プロ」であった。それだけになおさら、彼らの報告は注目に値する。

このあと、彼らの報告に従ってドレスデンのドイツ合唱同盟祭を追っていくが、それに先立って、ドイツとフランスにおける当時の男声合唱運動の状況について、簡単にまとめておこう。ドイツに関しては、松本の「19世紀ドイツにおける男声合唱運動」（松本2008）を、フランスに関しては、拙稿（井上2008，2009）を基にしている。

1. ドイツとフランスにおける男声合唱運動

・ドイツの状況

松本によれば、ドイツでは、19世紀の男声合唱運動に北と南の二つの起点があった。ベルリンのツェルターを起点とするエリート的、閉鎖的なリーダーターフェルと、スイス人ネーゲリによって南ドイツに広がった庶民的、開放的なリーダークランツである。このうち、男声合唱運動を牽引することになったのは、南ドイツのリーダーグランツの潮流で、その活動は南から中部ドイツへと広がっていった。南ドイツのヴュルテンベルクから始まった合唱祭は、1830年代以降、北ドイツ各地でも開かれるようになり、合唱祭の準備、組織化のために、地方組織が形成され、さまざまな合唱同盟が成立した。

1848年の革命後は、男声合唱運動の全ドイツ的組織化が課題とされるようになった。こうした中で、1862年9月21日と22日の二日間、41の合唱同盟の代議員がコーブルクに集まり、ドイツ合唱同盟が成立した。ドイツ合唱同盟は、北フランケン合唱同盟とコーブルク・ラントリーダーターフェル合唱同盟の共同作業として作られたもので、その目標は、「ドイツの男声合唱を広めるとともに高めること」であった。このドイツ合唱同盟が開催した大がかりな合唱祭が、1865年にドレスデンで開かれた同盟合唱祭だったのである。

ドイツの合唱協会運動の特徴は、それが当時の代表的な3つの協会運動、つまりトゥルネン（体操）協会、射撃協会、合唱協会のひとつであったことだと松本は述べている。3つの協会運動は、

相互に密接なかかわりをもちつつ、当時のドイツにおける「統一と自由」を目指す運動の一翼を形成していた。男声合唱はこの時期、広く市民層を結集したものとなり、祝祭参加者数、観客数ともに飛躍的に拡大した。

この時期のドイツの大規模な合唱祭の内容は、すでにある程度定式化されていたようであり、たとえば、今回取り上げる1865年のドレスデンの合唱祭と、1861年のニュルンベルクで開かれた第二回ドイツ合唱祭とを比較してみると、その内容は驚くほど似ている。祭典は4日間行われ、1日目は前夜祭。この日、ドイツ中から合唱協会員が列車で到着する。駅での出迎えから宿舎への案内までは歓迎委員会の仕事である。夜、市庁舎から祝祭会場まで旗の行進があり、歓迎演奏会が続く。2日目は午前中からリハーサル。そのあと、大会旗除幕、関係者あいさつ、合唱祭本番。3日目は旗を掲げて街中を祝祭行進する。この行進は祝祭のクライマックスである。その後、コンサートが続く。4日目は遠足。午後は合唱協会代表者が集まり会議。夜、お別れのコンサート。以上が合唱祭の主なスケジュールである。大規模な大会であるだけに、実行委員会、合唱委員会、財政委員会、宿舎委員会、建築委員会、装飾委員会、飲食委員会、歓迎委員会などの委員会が組織的に分担してイベントが実施された[2]。合唱祭は、まさしく、街を挙げて地域を挙げての大イベントであった。

・フランスの状況

一方、19世紀のフランスでは、都市部と農村部を問わず、「オルフェオン」と呼ばれるアマチュアの音楽団体が多数結成され、独自の音楽文化を作っていた。活動の担い手が民衆層の男性であったというところがフランスのオルフェオンの特徴である。オルフェオンという名はフランスにおけるアマチュア合唱運動の産みの親ともいえるヴィレムが自分の合唱団につけたものであるが、1850年代から60年代にかけて、オルフェオンは全国に広がって総称名詞として使われるようになり、さらには、吹奏楽団にも用いられるようになった。1855年にはフランス全土ですでに合唱オルフェオンは300、器楽オルフェオンは400を数えたが、1870年には合唱・器楽合わせてフランス全体で7,000団体にまで増加し、全国津々浦々まで広がっていた。

1851年からはユジェーヌ・ドラポルトの呼びかけでコンクールが開かれ始めた。1853年には、パリとセーヌ県の合唱団体連合が結成され、さらに、フランスのオルフェオン団体を後援する委員会が結成され、団体が全国規模で統括された。

1867年に開かれた第2回パリ万博では、合唱オルフェオン関係のイベントのために25,500フランが投じられ、数々の催しが企画され、これらは万博の主要なイベントのひとつとして位置づけられた。内容は通常行われているオルフェオン・フェスティヴァルに準じたものであったが、規模は国際的で、フランス国外からはベルギー、プロイセン、英国、スイスから合唱団体が参加した。フランス国内では、各地からオルフェオン団員が首都パリをめざして集結し、その数は5,000人に達し、参加団体は220を数えた。

フランスのオルフェオンの団体にとって、毎年の目標は各種コンクールやフェスティヴァルで

よい成績を収めることにあった。参加者のモチベーションを高めるために、主催者側は実力ごとにグループ分けして競争させ、さまざまなメダルや副賞を出した。たとえば、1867年万博の1等賞を得た合唱オルフェオンにはメダルの他に5,000フラン、2等賞の団体には3,000フランの賞金が出た。19世紀の1フランス・フランはおおよそ現在の邦貨の1,000円に当たることから換算してみると、1等賞のオルフェオンには500万円の賞金が与えられたことになる。コンクールでよい成績を収めて故郷に凱旋することは参加者たちの夢であった。コンクールとフェスティヴァルは、単なる演奏審査だけでなく、団旗を掲げての行進、褒賞授与式、ホストと審査員の宴会、スピーチなど、一連の行事があった。

オルフェオンの組織は合唱団体であれ吹奏楽団であれ、教師、司祭、アマチュア音楽家、職業音楽家、退役軍楽隊員、工場経営者、名士などが呼びかけて始まる場合が多く、民衆教化、地域振興、生涯教育、福利厚生等の一環、相互扶助組織としての性格が強かった。

2. フランス出発からドレスデン到着まで

1865年7月の全ドイツ合唱同盟祭に参加した団体はおよそ1,000、参加者は16,443人を数えたわけだが、外国からの参加も多く、音楽雑誌『フランス・ミュジカル』の記事では、アメリカ、フランス、イギリス、スイス、ロシア、ポルトガル、そしてノルウェーからの参加があったという（6 août 1865）。後述するように、ギメの報告では、さらに世界各地からの参加があったことになっている。フランスから参加したのはフランス在住のドイツ人合唱団2団体で、パリの「トゥトニア」とリヨンの「セシリア」であった。

ドイツ合唱同盟規約の第1条には「ドイツ合唱同盟は、ドイツにおける諸合唱同盟および、それと関係する外国で生活しているドイツ人の合唱同盟と男声合唱協会から成る」と記されており（松本 2008 : 148）、「外国で生活しているドイツ人の合唱団体」はドイツ合唱同盟の一部であった。つまり、この同盟祭には、外国からの参加が多かったとはいえ、外国からの参加はあくまでも「外国で生活しているドイツ人の合唱団体」であり、フランスで開かれたオルフェオンの国際フェスティヴァルのように、さまざまな国が一堂に集う真に国際的な催しとは趣旨が異なっていた。すでに中央集権国家として長い歴史をもっていたフランスと、合唱運動が祖国統一に向けた運動の一環として機能していたドイツとでは、めざすものがまったく違っていたのである。

『アール・ミュジカル』に寄稿したヌーコムの場合、ドイツ合唱同盟は外国の報道機関に招待状を出そうとは考えも及ばなかったので、自分は評論家としてではなく、合唱団の一員としてドレスデンを訪れた、と書いている。合唱同盟にとって、合唱祭は、あくまでも、世界各地に住んでいるドイツ人を対象としたものだった。

ヌーコムによれば、フランスから参加した2団体のうち、リヨンのドイツ人合唱団体「セシリア」は、1865年当時、すでに25年の歴史をもち、ヴェッツ Waitz が指揮していた。ドイツで有名になったメンデルスゾーンの合唱曲《リヨンのドイツ人》は、メンデルスゾーンが旅行でリヨ

ンを通った際に「セシリア」のために作曲したもので、この団体の自慢の種であった。

一方、パリのドイツ人合唱団体「トゥトニア」は、前身は古いものの、当時、結成後10年ほどの団体で、マイヤベーアが名誉会長であった。マイヤベーアはこの団体のために、《祖国への合唱》を作曲した。当時指導していたのはヴィットマン Wittmann であった。この団体はフランスのオルフェオンに属していたが、ドイツの例にならって、当時はすでにコンクールには出場しなくなっていた。とはいえ、「トゥトニア」はフランスで得た成功を自慢に思い、ドイツの同胞たちに見せるために、団体旗にフランスで得たメダルをすべて下げていったという。パリの「トゥトニア」からの参加者は総勢42名で、そのうち、パリから赴いた者は35，6名で、残りは、以前パリに住んで「トゥトニア」に所属したことのあるドイツ在住者であった。一行のうち、翌々日に急行列車を使ってドレスデンで合流する4，5名を除いて、31名は7月18日（火）夕刻にパリを出発し、20日（木）夕刻にライプツィヒに到着した。翌日、彼らは丸一日ライプツィヒで過ごし、リヨンから来た「セシリア」の一行と合流し、ライプツィヒの合唱団体と一緒に22日（土）の一番列車でドレスデンに向かった。

一方、リヨンの「セシリア」は、ギメによれば、メンバーの大半が仕事を休めなかったため、4人の代表団を送ることにした。一行は、指導者のヴェッツ、旗手のスポノルズ　Sponholz、ヌーヴィルのオルフェオンの教師ジェルネール　Gœrner、そしてリヨンの音楽団体の代表としてギメであった。彼らは7月19日（水）にリヨンを出発し、スイス経由でドレスデンに向かった。スイス国境の町ヌーシャテルで一泊し、バーゼル、カールスルーエを経て、深夜にハイデルベルクに到着。3時間後、フランクフルトに向けて出発。フランクフルトで列車を乗り換え、駅も違う駅から出発し、ゴータ、ヴァイマールを経て、午後8時にライプツィヒに到着。そこでパリの「トゥトニア」の一行と合流した。鉄道が通るようになったとはいえ、パリからでも、リヨンからでも、ドレスデンに行くには、当時、数日かかったわけである。

3. 大会1日目：7月22日（土）

大会は、7月22日（土）の夜の前夜祭から始まった。その日、ドイツ中から合唱協会員が続々と列車でドレスデンに到着した。合唱協会員を載せた列車の数はヌーコムによれば、62本に上ったという。パリの「トゥトニア」とリヨンの「セシリア」の一行は、ライプツィヒからの参加団体と共に、11時ごろドレスデンに着いた。ドレスデンは街中、美しく飾られていた。「フランスで祝日に窓に飾られる貧弱な三色旗や、一日限りの祝典の際に家に吊るされるツゲの飾り」とは比べ物にならないとギメは感心する。駅から市庁舎までの道中がすでにセレモニーの一部であり、到着した協会員たちはその場で行列を作り、市庁舎まで行進した。最初が軍楽隊、続いて、旗を先頭にパリの「トゥトニア」、リヨンの「セシリア」、そして、同じ列車で着いたドイツの合唱協会員が続き、最後にライプツィヒ大学の有名な合唱団「パウルス」の団員たちが剣を手にして、エスコートする。軍楽隊が奏でるのはフリードリヒ大王が愛好した《デッサウ行進曲》であり、

道すがら、大喝采が巻き起こる。家の窓ではハンカチが振られ、住民の歓呼の嵐に合唱協会員たちも歓声で応える。

市庁舎に到着すると、組織委員会のメンバーの熱烈歓迎のあいさつがあり、祝杯が供される。彫金細工の施された金属の大カップになみなみと注がれたワインをみなで回し飲みするのである。その後、宿舎を記したカードが配られ、宿舎へと案内される。宿泊と食事を提供するのはドレスデンの住民であった。

午後6時、市庁舎から祝祭会場のホールまで旗の行進が行われる。見物人が押し寄せ、遠方からの参加団体には大声援が送られる。実際、フランスから参加した「トゥトニア」と「セシリア」には、「パリ万歳、リヨン万歳、フランス万歳」と、ひときわ大きな声援が群衆から寄せられた。

・合唱ホール

演奏会場となった合唱ホールはこの合唱祭のために建設された木造の仮設の建築物である。縦300メートル、横150メートルの巨大な建物で、街から1〜2キロ離れた[3]エルベ河のほとりに建てられており、乗合馬車と蒸気船が街との往復に用意されていた。このホールの音響が非常にすぐれていたことは、ギメもヌーコムも強調している。フランスでは、合唱祭のために仮設ホールを建設するようなことは行われず、既存の大きな建物が使われるのが通例だったが、音響は概してよくなかった。

仮設ホールの脇に15ものビュフェが立ち並び、ホール内の客たちに飲み物を提供していた。上階には旗を飾るギャラリーがあり、参加団体の旗が飾られていた。そのギャラリーの下に警官と消防士の詰め所、そしてレストラン、ビュフェ、お菓子屋、砂糖菓子屋が軒を連ね、郵便局、電報局、読書室、さらに両替所まで設けられていた。

合唱祭初日は午後8時に歓迎コンサートが始まり、11時ごろまで続いたが、ギメは歓迎のあいさつが、ホールのもっとも離れたところにいても明瞭に聞きとれることに驚いている。彼はその理由として、ホールの音響のよさ、聴衆の注意、そしてドイツ語の響きの三点を挙げている。

歓迎コンサートでは、最初に、ライヒェルの合唱曲が、作曲者自身の指揮により、ドレスデンの複数の合唱団によって、四部合唱で歌われた。それは、詩人のパープストが作ったこの合唱同盟祭のモットーを組み込んだ作品であった。ヌーコムはこのモットーをフランス語に翻訳することは難しいとして、ドイツの合唱協会の友愛の精神を述べていると述べて、ドイツ語をそのまま掲載している。

Herz und Lied, frish, frei, gesund！　（心と歌を、新鮮に、自由に、健康に！）
Wahr dir's Gott, du Sängerbund！　（汝、合唱同盟よ、神に誠実であれ！）

ライヒェルはドレスデンの有名な合唱団体、リーダーターフェルの当時の指導者であった。この合唱団はヴァーグナーやユリウス・オットーなどの作曲家が指導したこともある、由緒ある団

体であった。演説をはさんで、演奏会の後半にはドレスデンの合唱団に他所の合唱団も混じり、みなで合唱団の一般的なレパートリーの数々を歌って親交を深めた。

・合唱祭の通貨

ギメによれば、初日は観客が比較的少なかったので、観客席のベンチを重ねてテーブルのように使い、カフェ・コンセールのような形にしてあった。つまり、観客席でビールのジョッキを傾けながら演奏会を聴くことができたわけである。しかし、パリのカフェ・コンセールのような喧騒はなく、給仕たちも静かに立ち働き、客に注文の品を運んでいた。統一前の当時のドイツでは、通貨体系は非常に複雑で、地域によって使われる通貨が異なり、グロッシェン、ペニヒ、クロイツァー、ターラー、フローリンなど、さまざまであったが、この祝祭期間中だけは特別の共通の硬貨が作られ、流通していた。その硬貨の表には双頭の鷲、裏には音符が刻印され、二分音符が1単位、全音符が2単位、という具合に作られていた。4拍子1小節分がビール一杯に当たり、2小節半分がビーフステーキに相当したという。このことからも、合唱祭がさまざまな面で実験的な試みであったことがうかがえる。

・合唱運動とブルジョア

ギメは初日の歓迎コンサートは最後まで聞かずに宿舎に引き揚げたが、ヌーコムの方は最後まで参加した。ところが、街まで帰るのに蒸気船にも乗合馬車にも乗れず、途方に暮れていると、ひとりの若い消防士が声をかけ、宿舎まで送ってくれることになった。消防士の本職は博士号をもつ弁護士で、「非常に正確に」フランス語を話したという。彼の話によれば、消防士は、ほかのドイツ諸邦と同様、トゥルネン（体操）協会員の中からリクルートされて組織されており、一方、彼はドレスデンのリーダーターフェルの協会員でもあった。彼は一週間に二回体操し、二回、科学や文学の講演を聞き、二回リーダーターフェルで歌い、残った日曜日には、兄が牧師を務めている村の教会でオルガンを弾くか、射撃をするとヌーコムに述べたという。彼は射撃の祭典から帰ってきたばかりであった。ヌーコムが「それで訴訟は？」と聞くと、彼は「毎日弁護しています。火事がない限り、そして、ウェーバーやメンデルスゾーンの合唱曲を歌わない限りにおいては」と答えたという。ヌーコムが描いたこの消防士こそ、ドイツの男声合唱を支えていたブルジョアの典型であった。先述したように、当時のドイツでは、トゥルネン協会、射撃協会、合唱協会の3つの協会運動が、相互に密接なかかわりをもちつつ、ドイツにおける「統一と自由」を目指す運動の一翼を形成していたのである。このような合唱協会員のあり方はフランスとはまったく異なっていた。

フランスのオルフェオンの場合、構成メンバーは「名誉会員」と「活動会員」からなり、名誉会員は法律的・知的な援助、出資者として機能し、実際に歌ったり演奏したりする「活動会員」は民衆層、職人・商人の小ブルジョア層、農村部では農民社会の最下層であり、ドイツの男声合唱協会のように、社会のさまざまな階層の男性が一緒に歌うことはなかった。フランスでは、オ

ルフェオンは民衆を道徳的に啓蒙するための装置として認識されていたのである。

4. 大会二日目　7月23日（日）

午前5時起床。ザクセンの全軍楽隊がドレスデンの街中を演奏して回り、合唱協会員を起こす。7時から合唱ホールで合唱祭のリハーサルが開始される[4]。初日の23日には、ほとんどの参加者がリハーサルに参加し、5時間にわたってリハーサルが行われた。

・ドイツの合唱団の水準

ここでヌーコムが注目するのは、ドイツの合唱団の水準である。今回、参加者には、実行委員会が作った楽譜集が渡されていた。その楽譜集は90ページにも及ぶ分厚いもので、この音楽祭の演奏のために選ばれた24曲の作品が収められており、そのうち、この音楽祭のために作曲家に依頼して書かれた新曲も多かった。ほとんどは難しい作品で、フーガ様式で書かれているものもあった。しかも、この楽譜集が配布されたのは5月の初旬であり、週に2回集まって練習するのがやっとの合唱団にとって、決して、練習時間が十分にとれたわけではなかった。それにもかかわらず、ヌーコムは、この大人数の合唱にしては、比較的完璧なアンサンブルであることに驚き、ドイツの合唱団がすぐれていることが明らかになったと述べる。

一方、ギメもドイツ人の音楽能力を評価し、次のように記している。「文字が読めるドイツ人はだれでも歌うことができ、楽譜が読めるので、ドイツ人が音楽協会を組織するときには、われわれの〔フランスの〕田舎の労働者が音楽をやりたいと願ったときに直面する、無味乾燥で不快な練習は何もしないのだ」と。フランスでは、楽譜の読める団員が少なく、しかも、基礎的な訓練をいやがるため、初等教育で音楽が取り入れられている地域を除いては、楽譜を読めないまま、コンクール曲だけしか練習しないというケースも増えていた。さらに難しい曲は合唱団で敬遠されるため、レパートリー自体も増えないという悪循環が起こっていたのである。

ギメは1861年、ローヌ県の上院議員に、音楽教育を普及させるために、無償の公的講座の設置を検討してほしいと請願したグループの一人であったが、リヨンの状況は改善されなかったようである（*Dictionnaire de la musique en France* : 719 ）。

さて、合唱祭に話を戻すと、ヌーコムは合唱祭のオーケストラが金管のみで構成されていることを残念がり、今回の演奏される作品を書いた作曲家のうち数名は、自作の楽器編成を変えなければならなかったと書いている。しかし、この合唱の規模にふさわしい数の弦楽器奏者を揃え、それらの奏者を舞台に上げることは難しかったことは認めている。

・舞台での配置

ホールの中では、ひな壇の下に、指揮者席を取り囲むように、200人の独唱パート担当者が並び、その左に第1テノールと第1バス、右に第2テノールと第2バスが段状に並ぶ。中央の、一

段目にオーケストラが配置される。独唱パートとオーケストラのためには副指揮者がいて、指揮者の動きを逐一伝えた。実行委員会は、7月23日と24日の全4回のコンサートのそれぞれを担当する4人の指揮者を任命し、そのほかに、合唱曲の作曲者に自作の指揮を依頼した。指揮者はメガホンで注意を与えた。いくつかの合唱には200人編成の金管オーケストラが伴奏したが[5]、その音も合唱が鳴り響くとかき消されてしまったという。

・繁盛する飲食店

リハーサルが終わると、団員たちは喉の渇きをいやし、食欲を満たすために、ホールの回りに設けられているビュフェに走る。ギメはその様子を細かく描写する。「ドイツ人たちはわれわれよりもたくさん飲み食いすると思ってはいけない。食べ方が異なるだけなのだ。われわれは決まった時間に似たような食事をとるが、ライン河の向うの隣人は、空腹時にいつでも、一回の量は少なく、食べるのである」(Guimet 1863 : 16)。

ギメは、100,000杯のビールが合唱祭のために作られたが、それは一施設で作られた量に過ぎず、全体量は推して知るべし、としている。この飲食店の繁盛ぶりはフランスからの参加者にはよほど印象的だったらしく、ヌーコムも、合唱ホールのビュフェだけの分として、消費された量を次のように挙げている。

牛の燻製　5.5キロ、セルヴラソーセージ　2.8キロ、ハム　9キロ、キャビア　7.5キロ、バター　1.5トン、卵　160,000個、ニシン　10トン、グリュイエールチーズ120個、高級パン　毎日12,000個、普通のパン　毎日10キロ、牛25頭、仔牛　毎日100頭。

まさしく、合唱祭は「飲めや歌えや」の祝祭であった。フランスのオルフェオンのフェスティヴァルとコンクールでは、このように大規模な都市を挙げての祝祭という側面は見られなかった。

・式典とコンサート

午後3時、ホールの正面で式典が始まり、関係者のあいさつや全ドイツ合唱協会旗の除幕が行なわれた。除幕の瞬間、鐘が鳴り響き、大砲が鳴らされ、15,000人による合唱が始まった。そこで歌われたのが、《ドイツ人の祖国とは何か》である。ヌーコムは、この合唱は、ドイツ内部でまだ反目していることを各人が感じているという点で悲しみの叫びであり、そのために戦う用意ができているという点で力の叫びであったと書く。一方、ドイツ語を解さないギメは、戸外でのこの大人数の合唱はまとまりを欠き、合唱祭で最も弱い部分であったと述べている。

しかし、ギメは、式典を進行させた100人の乙女には心を奪われた。ヌーコムによれば、ドレスデンの若い女性たちの中から選抜されたという100人は、白い衣装と、ナラの葉で編まれた冠——白と緑はザクセンの色でもある——を身に着けていた。それはフランスの民衆的な式典を取り仕切る高官たちの制服よりもよほど優美であったとギメは評価する。男声合唱協会の祭典で、

若い女性たちが文字どおり花を添えていた。ドイツの男性たちは、妻や娘を合唱協会員としては受け入れなくとも、祝祭への参加は大いに喜んだのである。

午後5時から大コンサートが始まり、第1部で6曲、第2部で6曲の計12曲が演奏された[6]。そのうち、ファイスト、 J.オットー、C.シュッペルト、Fr. アプト、クレープス、J.G.Mミュラーなど、作曲者自身が指揮した作品も多かった。ファイストは自作のほかに、第1部で演奏されたメンデルスゾーン、シュナイダー、マルシュナーを指揮し、第2部ではクレープスが自作のほかに、ジルヒャー、ツェルナーZœllner、ラッヘナーの作品を指揮した。これらの合唱の独唱部分は200人によって歌われ、第1部では、ライプツィヒ、テューリンゲン、ゴータ、ルドルフシュタットの合唱協会、第2部では、ニュルンベルクとヴュルツブルクの合唱協会が担当した。

特に成功を収めたのは、ジルヒャーの非常に単純な合唱曲で、アンコールされた。これは死に向かって歩く兵士を題材にしたものであった。一方、ツェルナーの合唱曲は途中で合唱が合わなくなってしまい、聴衆をがっかりさせた。しかし、クレープスはこの曲をもう一度冒頭からやり直し、今度はうまく進んだので、会場は大いに沸いたという。

コンサートにはザクセン国王が臨席した。第1部と第2部の間に国王の臨席に感謝する演説がなされ、会場は歓声に包まれた。

午後9時にコンサートはいったん終了し、その後は夜遅くまで、軍楽隊と合唱団が交互に演奏した。

5. 大会三日目：7月24日（月）

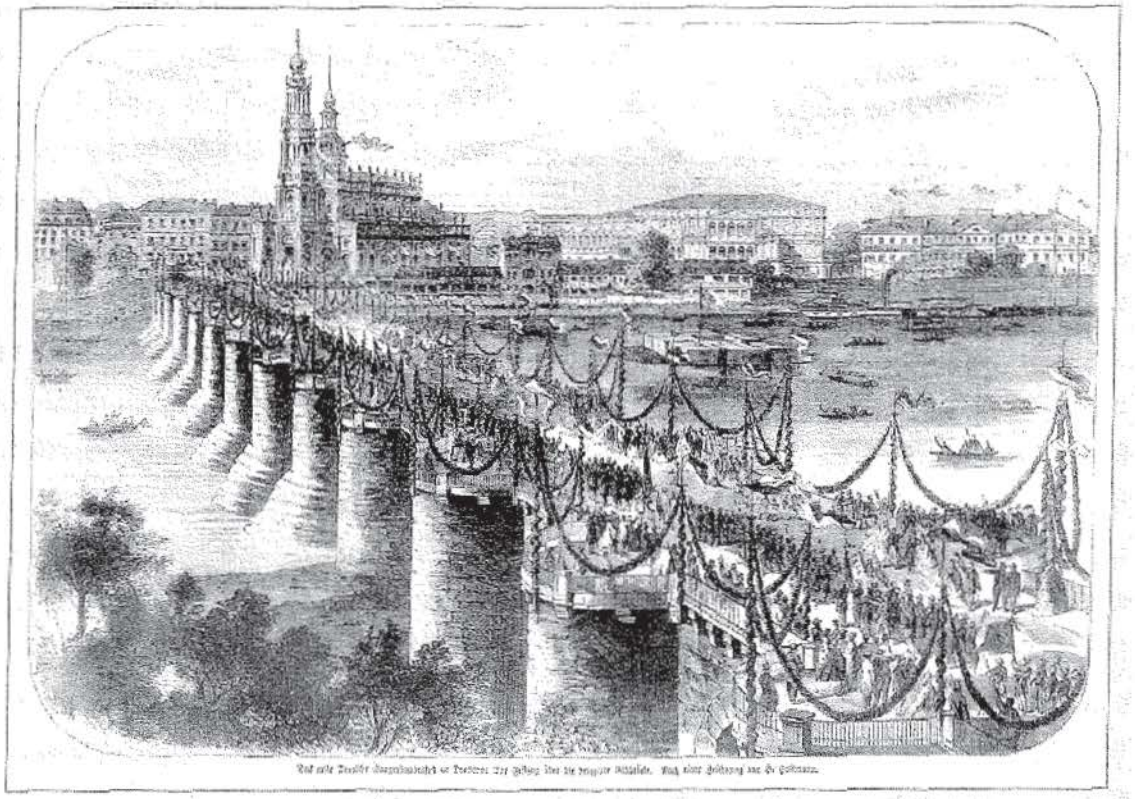
合唱協会員の起床は前日と同じく朝5時で、リハーサルが行われたが、ヌーコムによれば、リハーサル参加者はさすがに少なく、練習は3時間だけ行なわれたという。この日は合唱祭のなかでもクライマックスとなる、旗を掲げてドレスデンの街の歩く祝祭行進が行なわれた。合唱ホールに飾られていた各協会の旗1500本は、3隻の蒸気船に積まれ、大砲の音とともに岸を離れ、ドレスデンに運ばれた。旗が到着したドレスデンでは、それらの船を大勢の見物客がハンカチを振り、帽子を振って歓迎した。

・祝祭行進

午後1時、行列が始まった。ヨーロッパ各地からやって来た合唱協会の団員や代表団は、アルファベット順に3つのグループに分けられ、旗と共に、おおぜいの見物人がひしめくドレスデンの街中を練り歩く。街中は異様な熱気に包まれた。

ギメは自分が属した第1グループの行列について、その構成を記している。馬に乗った合唱祭の責任者に先導され、騎馬隊のラッパ手たち、ドイツの三色旗を護衛するドレスデンの若者たち（騎馬）、行列委員会のメンバーが続き、さらに、トゥルネンのグループが協会旗をもって進み、射撃協会の音楽隊、協会旗をもった射撃協会の一行、ヴィッティングの音楽隊、フェンシング協

会メンバー、全ドイツ合唱協会の旗を護衛する儀仗兵たち、そして、特別ゲストやドイツ合唱協会のメンバー、祭典のさまざまな委員会のメンバーなどが続く。さまざまな音楽隊の対外国の諸都市からの代表団の後に、ドイツの合唱協会がアルファベット順に続いた。第１グループはＦのフランケンまで含んでいた〔図版〕。



Zug der Sänger über eine Brücke beim Deutschen Sängerfest 1865 in Dresden.

「ドレスデンの 1865 年ドイツ合唱同盟祭での橋の上の合唱団員の行列」

150 Jahre Schwäbischer Sängerbund 1849 e.V. Tübingen: Silberburg-Verlag,1999.

注目されるのは、外国からの代表団として数多くの都市が挙げられていることで、そこには、ベルゲン、ベルン、ブカレスト、ホンコン、リスボン、リバプール、ロンドン、マンチェスター、ミルウォーキー、パリ、サンクト・ペテルブルク、フィラデルフィア、リガ、ワルシャワ、チューリヒなどの名前が挙げられている。隣国のスイスやフランスはもちろん、北欧からも、ロシアからも、アメリカからも、アジアからも、参加の申し込みがあったことがわかる。ギメは言及していないが、このときの祝祭行列は「ゲルマン精神の行進」と呼ばれ、大会会場にドイツの各地域のアレゴリー像が掲げられていたという（松本 2008：152)。

・《デッサウ行進曲》

この大人数の一行は、ザクセン軍楽隊の演奏する《デッサウ行進曲》に従って歩いた。演奏される曲は、4時間に及ぶ行進の間、そして、音楽隊が22グループもあったにもかかわらず、徹頭徹尾この《デッサウ行進曲》だけだった。ギメはこの曲はフランス人にとっては陳腐な繰り返しかもしれないが、ドイツ人にとっては、愛国的なこの曲は敬虔な表現として聞こえるのだろうと述べている。もっとも、彼によれば、群衆と行進の喧騒の中で、《デッサウ行進曲》はあまり聞こえなかったという。それよりも、「音楽による万歳」が圧倒していた。

・「音楽による万歳」

一般的な「音楽による万歳」は、3つの和音から成っていた。まず、合唱全体がユニゾンで主音を歌い、次にドミナント和音を響かせ、最後に主和音を4声部で伸ばすというものであった。これと別に、それぞれの合唱協会独自の4小節あるいは8小節の「音楽による万歳」があり、中にはその楽譜を小さい紙に印刷して、群衆に配布し、一緒に歌うケースもあった。見物客は初見でその楽譜を見ながら自分の声域にあった声部を合唱協会と一緒に歌ったのである。群衆が初見で楽譜をみながら合唱する、という光景は、フランスから行ったギメには非常に印象的であった。

市庁舎の前には、前日、大会旗の除幕をつかさどった100人の白い衣装にナラの葉の冠をかぶった若い女性たちが二列に並び、花かごを手にもって、合唱協会員に花を手渡していた。ギメが彼女たちにフランス語で話しかけると、彼女たちはみな「とてもよい」フランス語で答えたという。また、若い娘たちは、家いえの窓に陣取り、練り歩く若い合唱団員たちにほほえみかけた。これはフランスでは決して見られない光景であったらしく、「フランス人の母親たちの多くが、このくだりを読んで眉をひそめるだろう（…）しかし、これがドレスデンの合唱祭に特別な礼儀と威厳をもつ特徴を与えている」と評価している。

4時間もの間、飲まず食わずで練り歩くのは疲れることだったが、そこはよくしたもので、太った父親たちは団員たちに菓子を手渡し、「水を通さない」紙コップに入れて、ビールをふるまった。

午後6時から第2回の大コンサートが始められた。モール、クレッチマー、ティーツ、ファン・アイケン、リーツがそれぞれ指揮台に立ち、自作の合唱曲を指揮した。リーツは自作の他に2曲の歌と、ウェーバーの合唱曲、そしてクロイツァーの《巡礼》を指揮し、多大な成功を収めた。今回、独唱パートはウィーン、プラハ、テプリッツ、ベルリン、ハノーファーの合唱団が担当した。

演奏は、ギメによれば、前夜よりもすぐれていたという。合唱協会員たちが耳を聾するばかりのアンサンブルに慣れてきたためだと分析している。前日同様、コンサートの後、別のコンサートが始まり、夜中まで続いた。

6. 大会 4 日目：7 月 25 日（火）

大会最後の日は広大な公園への遠足が行なわれた。軍楽隊が公園のあちらこちらに置かれ、演奏を聞かせた。合唱協会員たちが公園でくつろいでいる間に、各合唱協会代表が集まり、今後の合唱運動について協議が行なわれ、4 年後の大会の開催地についての話し合いが進められた。夕刻、参加者は合唱ホールをめざした。そこで、ダンスパーティーが開かれることになっていたのである。ところが、激しい嵐となり、全員が合唱ホールに身を寄せたため、踊ることは不可能になってしまった。終了時刻の真夜中が近付くと、合唱協会員たちはひな壇に整列しメンデルスゾーンの《さらば！》を歌った。これが参加者全員で歌う最後の曲であった。一人の少女が演壇に上がり、合唱祭の終了を告げた。

ギメはドイツ同盟合唱祭が終わったあと、ベルリンに回り、そこから直接リヨンに戻った。

7. ギメによる考察

帰国後、ギメは、このように魂を高め、心を満たす大きな祭典がなぜフランスでできないのかを自答する。

> ドイツに遅れをとっているとはいえ、フランスで音楽が盛んになっていることは間違いない。すでに村の教区にはどこでも、少なくとも合唱オルフェオンか器楽オルフェオンが存在している。音楽祭は増え続け、多くの合唱協会が集まっている。大衆の間で生じているこの芸術運動は、フランスでは個人のイニシアチブによって進められている。
>
> この進歩のために使われている動機は何かといえば、それは自己愛であり、自尊心である。コンクールが組織され、そこではもっとも上手な協会がメダルを手にする。そして、この賞を得るために、オルフェオンがあちらこちらに作られ、コンクールの審査員の前に駆けつける。コンクールで敗れた協会は崩壊し、勝利した協会も成功しなくなった後まで生き残ることはできない。音楽協会は手早く作られ、それ以上に簡単に解体してしまう。

ギメのこの記述を読むと、当時のフランスのオルフェオンのあり方に彼が大きな疑問を抱いていたことがうかがえる。コンクール至上主義の弊害はギメが身をもって体験していたことであった。リヨンで私財を投じて合唱オルフェオンを作り、指導していたギメにとって、審査員に演奏のでき具合をつねに評価されるコンクールという制度は腹立たしいものであった。

優劣を競うコンクールという思想は、フランスでは、ローマ賞コンクールや博覧会での出品物の等級づけに象徴されるように、ごく当たり前のものであった。オルフェオン活動においても、1851 年以降、コンクールが行なわれるようになり、合唱団をランクに分けて審査したり、やがて初見演奏の審査を取り入れたり（1865 年以降）するなど、審査の細分化、専門化へと向かっ

て行った。当初は民衆が合唱したり、楽器を演奏したりすること自体に感激していた批評家たちも、次には演奏の完成度を要求するようになり、そこで大きな問題が出てきたのである。

おわりに

オルフェオンの特徴は、労働者や農民の階層が活動会員の主体を占めていたことであるが、より上層の階層の人たちだけで作るアマチュア合唱団体もフランスには存在していた（たとえば、モスコヴァ公が貴族を中心に組織していた「古典宗教声楽協会」など）が、それらは、同じアマチュアの音楽団体であっても、決してオルフェオンとは呼ばれなかった。オルフェオンとその他の合唱団体との間に、つねにはっきりした線引きがなされているわけではなかったが、さまざまな階層の合唱協会が、ドイツの音楽祭のように協力してフェスティヴァルを催すことはなかったし、一堂に集まって声を合わせて歌うことも例がなかった。

ドイツにとっては、合唱運動は祖国統一のための大きな柱であり、合唱祭は地域を挙げて祝うべき大きなイベントであった。各合唱協会が優劣を競うことは問題ではなく、大勢の男性が、声を合わせて、階級を超えて、一緒に歌うことが重要であった。そして、それを陰で支えていたのは――ギメもヌーコムも共に指摘しているように――ドイツ人の高い音楽水準であり、読譜能力であった。フランスのオルフェオン運動の創始者であるヴィレムは「ヴィレム・メソード」という数字譜を開発した人物である。オルフェオンの指導者たちにとって、低い社会階層の団員たちに楽譜を読めるようにさせるということは難事業であり、そのために莫大なエネルギーが費やされ、しかも効果はなかなか上がらなかった。団員たちがソルフェージュの練習を嫌がることも多かった。自分自身、オルフェオンの指導者として労働者合唱を指揮していたギメにとって、ドレスデンの合唱連盟祭で、一般の見物客が、楽譜を初見で唱和する、という祝祭行列での光景は驚きであった[7]。

ドイツの合唱祭でもう一つ注目されるのは、見物客が多いことである。ドレスデンのドイツ合唱連盟祭に集まった見物客の20万人という数は、フランスのオルフェオン・フェスティヴァルでは考えられない数字である。自己完結型、自己満足型のフランスのオルフェオンと比較して、街ぐるみで大がかりなイベントを盛り上げる、集客能力の高いドイツの合唱祭は音楽イベントの新しい形を提示していたとも言えよう。

なお、本研究は科学研究費（22520143）の助成を受けたものである。

注

1. ドイツ語読みでは「トイトニア」で、ドイツでは学生団体や合唱団によく使われる名称だが、ここではフランス語読みにしている。
2. ドレスデンの合唱祭でも、実行委員会の下に、装飾、音楽、財政、飲食、建築、警備、歓迎、宿舎を担当する委員会が設けられた。

3. ギメは1キロ、ヌーコムは2キロとしている。

4. ギメによれば6時から。

5. *France musicale* によれば219名。

6. ギメは14曲としている。

7. 松本が指摘している通り、プロテスタントの教会では、会衆自身がドイツで書かれたコラールを歌う習慣があり、民衆が合唱に接する機会がカトリックに比べて多かったのは確かだが、南ドイツではカトリックが多かったわけであり（松本2008：124）それだけでは合唱の水準の高さがどのような要因でもたらされたものだったのかは説明できない。当時の一般的な音楽教育のあり方についても検討が必要であろう。

参考文献

Dictionnaire de la musique en France au XIXe siècle, Paris: Fayard,2003.

Gumplowicz, Philippe. *Les travaux d'Orphée, Deux siècles de pratique musicale amateur en France* (1820-2000), Paris: Aubier,1987 et 2001.

Guimet, Emile. *Cinq jours à Dresde, Juillet 1865*. Lyon : Imprimerie d'Aimé Vingtrinier, 1865.

Neucomm, Edmond. « Les Fêtes musicales de Dresde », *L'art musical*, 1865.

150 Jahre Schwäbischer Sängerbund 1849 e.V. Tübingen: Silberburg-Verlag,1999.

井上さつき　『音楽を展示する——パリ万博1855-1900』法政大学出版局,2009.

井上さつき　「19世紀フランスの「オルフェオン」研究」『愛知県立芸術大学紀要』37：1-19,2008.

尾本圭子、フランシス・マクワン『日本の開国——エミール・ギメ：あるフランス人の見た明治』創元社,1996.

笠羽映子「エミール・ギメと音楽（2）」『比較文学年誌（早稲田大学比較文学研究室）』27：210—236, 1991.

松本　彰「19世紀ドイツにおける男声合唱運動—ドイツ合唱同盟成立（1862年）の過程を中心に—」姫岡とし子他『ジェンダー（近代ヨーロッパの探求　11）』ミネルヴァ書房：111-161,2008.

本稿作成にあたっては、新潟大学の松本彰教授にご助言をいただきました。ご厚意に心から感謝します。